

べてを忘れ眞の愉快が満喫できるのである。世の推移は目まぐるしい程であるが、唯黙々とやる中に心の落着きを得、如何なることにも一喜一憂することなく確乎たる信念を得るに至るのである。

昭和十九年度は國家の存亡を賭するといふ。吾々は唯本分に邁進すればよいのだ。より偉大なものをつかまんだため唯練習する積です。

射撃部報及び部歌

文二甲三 大鶴隆保

國家危急存亡の秋に際して、益々剛毅の士風を振興し、吾人の内に不動不拔の底力を養ひたいものである。然し乍ら、底力なるものは、一朝一夕にして得られるものではない。「兵を養ふ十日、用一朝にあり。」と故人が言へる如く、平常の隠れたる研磨が大切であるまいか。何事にもあれ、平素の努力が必要であり、部にとつても特にさうである。

我が射撃部は創設以來、僅に五ヶ年にも満たないものである。

然し乍ら先輩の不斷の御盡力と、五十有餘年の光輝ある傳統の中から生れたものであつて、今や草分けの時代を蟬脱し早や黄金時代をすら目指して、一步一步を進めて居る。黄金時代とは、單に試合に勝つと言つた意味ではなく、部員の和合が全うされ、眞の求道が成立つ時の事である。今、向上の途を歩みつゝある我が本年

度の部史の一端を顧みて見ん。

扱て、十七年八月のインターハイ出場が無念にも、遺憾の涙と化して以來地味な汗と油にまみれた苦しみを甘受して來たのが、我が部であつた。我が部のモットーは一途なる精進の道であり、黙々と靜かなる事林の如く、疾き事風の如く練習そのものに奮闘する姿こそ、部の理想である。凡夫の部員は只練習し、兵を養ふのである。微力なりとも、その力は次の戦蹟となつて現れたのである。

※九州大學高専大會 五月三十日 於長崎

試験中とは言へ、三年生の意氣に感じて、補員も作らずに僅か正選手五名にて遠征。當試合には良く日頃の腕を發揮して、四人目迄は他校を壓して第一位を占む。しかし乍ら、天運我に味方せずして第五番射手射誤りて第五位に落つ。居合せた九大の先輩本井氏を始め相集ひし六人の心中は今茲に喋々するまでもなく、龍南人の誰しもが共感し得るものであらう。成績は左の如し。

第一位	九 齒	一五一點
第二位	九大 A	一三三點
第三位	九大 B	一三二點
第四位	佐賀高	一三一點
第五位	五 高	一三一點

内譯(二五、三一、三九、一四)

個人三等 五高第三番射手 三九點

※佐高當番四高戦 六月六日

長崎に破れた吾々は其の敗因を顧みつゝ、武夫原の一角に汗と

油の苦闘を續ける事僅に旬日足らず。其の間は何時にも増しての猛練習。即ち据統連續五十回、銃の擧げ下げ百回。唯經驗せしもののみが此の苦しみを知るであらう。「コガナキヤ本當ノ味ガセヌ。」と唱ふポートマンの句こそ、良き此の表現と言へる。
 當日三年生諸兄は考査中であつたが、その愛する部を捨て難く出陣され、茲に全部員は意氣衝天の氣魄を以て優勝旗を手にし乍ら出場。

第一回戦。雨の中にて佐高と五高の大接戦が演ぜられた。

1	五高	①長	②谷	③津	④荒	⑤山	⑥古	⑦何	⑧永	⑨大	⑩大	278
	(川)	(濱)	(川)	(卷)	(本)	(賀)	(川)	(路)	(山)	(鶴)		
2	佐高	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	278
3	福高	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	262
4	七高	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	171

右の成績の如く前半に於て五高軍稍不調の爲、佐高勢にリードされる事四十數點であつた。中には不安の聲さへ出す者も無いでは無かつたが自己の力を知る者には不動の信念が心底に存して居たに違ひない。「吾を知り敵を知らば百戦危からず」とはげに古人の名言であるが、當時の戦士に此の如き吾を知る色の濃厚だつたと斷言するも、強ち過言ではないだらう。後半戦に於て我が二年及び一年軍の力戦良く日頃の實力を發揮し、一舉に其の差を無くして同點となし、手に汗を握りつゝも、第一回戦に第一位を

獲得す。

第二回戦

1	五高	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	288
2	佐高	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	283
3	福高	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	275
4	七高	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	205

第二回戦前半は我が三年生善戦して、次位を壓する事貳十點にして第一位。好調に好調を重ねて、勝利は掌中に歸したるも同然であつた。時に、一同の顔には喜びの色現はれ初めて居た。かゝる時、慎重の意を述ぶるものも出で、前半の好調子は功を奏するのである。

後半に於ては、我が軍不調にて、佐賀の追撃に耐へ兼ねんとした。遂に危機とすらなつたが、其の儘押切つて覇權は我が手に歸し、高らかに凱歌はあがる。

茲に、日頃の練習苦闘は結晶して連覇の業成りて、部史の一頁に光彩をそへ得たのである。此の試合に特筆したきは三年生の長谷川兄と一年生の永路兄である。長谷川兄は先のインターハイにて個人一等の譽を得たる技術の持主である。同兄は此の日にも緒戦に於て、常に敵を壓し我が門出に幸を齎らし、且又永路兄は中學にて養ひし腕を遺憾なく發揮して、危機の我が趨勢を回復したのである。兩兄共連覇の鍵となれりと言つても過言ではあるまい。

かくして四高戦は終つたのであるが、その勝因は如何。つらく思ふに、我々は我と大差なき敵をしりつゝ又我を知りつゝ、足らざるを補ひ正して不斷の勞を積んだからではあるまいか。自己の無力を反省しつゝ、努力し、唯一途に「射道」てふ部の道に勵む處に力が湧くのではあるまいか。兎角、吾人は皆凡夫である。凡夫乍らも皆良く平凡專を貫徹する様努力する。殊に黙々として倦まず勵まれし諸先輩の熱心さには頭が下るものである。一般に何處の學校も大同小異であつて、練習の時には相當の點を出す。然し、試合になると、練習の時の點數が出せない。其處に考ふべき點があるまいか。思ふに、其は「平常の心」を持ち続けらるや否やに依るのである。平常心を以て、即ち練習通りにやれば必ず命中するものである。平常心を持ちつゞける事は易事であり難事であらう。吾人の稽古は技を磨くと共に、平常心を養ふ事であらう。此の心と技倆を磨く吾人の求道の途は遙かなものである。然し之が達成には、只、「牛の歩みのよし遅くとも」で賢實なる一歩一歩が最も近い途であらう。

大略、今年の部報を試合中心に述べて見たが多々過言もある事だらう。然し乍ら何卒微志を汲まれん事を。

猶、校長先生を始め諸先生、諸先輩の御援助と、併せて龍南人諸兄の御協力に感謝の誠を捧げてやみません。又我が射撃部育ての親としての、小田先生の武運長久を御祈り致す次第。

五高射撃部々歌

文一甲二

大野直人作

一、見よ曉闇に紫雲濃く

たなびく空を匂はする

あな神來の紅き日を

瑞氣あふるゝ朝ぼらけ

これぞ龍南射撃部の

享けし生命の象徴なる

二、齡は未だ若けれど

祖先の教訓幸ひて

銃執る手には脈々と

五十餘年の傳統に

培はれける剛毅將

朴訥の血が通ふなり

三、夏酷熱の陽の下に

草木しほるる野に伏せば

ぬぐひもやらぬ汗數條

しほたる若き顔は

必中の意氣みなぎりて

銃聲四圍にこだましぬ

四、冬凜冽の阿蘇嵐

膚刺す野に身を曝し

昭和十九年二月二十三日より三月三日迄。此の十日間こそは我
我にとつて最も意義深い期間であつた。少年通信兵學校に宿泊。

理 二 竹 下 英 世

少年通信兵學校宿泊訓練記

通信訓練班

擧げたる銃は氷るれど

必中の意氣今こそは

彼方の白き標的を

ねらふ眼に燃ゆるかな

五、試練の鞭に技成らば

腕百練の鐵と凝り

必殺の氣は唸りもて

飛びゆく彈丸に生命こむ

いざや摩かむ吾が腕を

うまずたゆまぬ精神とも

六、暗雲こむる混濁の

四海道なき世なりとも

龍南健兒が魂觸れて

精神と技を練りに練る

我等が生命の射撃道

永久に放たむその光

温容にして嚴格な元氣潑刺たる教官殿の下、我等二十名の熱と意氣は逆り武藏野の空に龍南の電波は躍動したからである。トツトに熟練せる學生が宿泊訓練をうけ、始から實器材で實戰即應の猛訓練をやつたことは少通校（以下略してかういふ）としてもまた

全國の學徒としても始めてのことであつたさうである。十五年創立以來龍南人諸兄より非常にお世話になりつゝ育つてきた通信部が此の様に遅しくなつたことを報告して感謝の言葉に代へる。以下の文は一年（現在二年）の諸君が書いた班の日誌を主として筆者がまとめたものである。なほ書くわけに行かない事項も相當あり或は奥歯に物のはさまつた様な所があるかも知れないが豫め御諒承されたい。

□ 入 校

二十三日一〇時三〇分東京着。直ちに宮城前に行き皇居を伏し拜み日本人たる感激に咽んだ、東京にて此の程歸還された部長稻葉先生、また本訓練に参加せんすとの帝大の三先輩と會した。十三時東京驛發。少通校に向ふ。

宏々たる武藏野の中、青々たる松林の中に少通校はある。敷地の大なる、五高のあの大きな面積に數倍する。環境雄大にして景色五高と頗に似た所あり。

驛には助教殿が出迎へてをられた。整列、服装を正して正門へ。正門には擔任官福田少佐以下六人の教官助教殿がこれまた正装して出迎へてをられた。歩調を元氣よくとつて校門をくぐる。「東京陸軍少年通信兵學校」の表札がまぶしい程である。門には國旗を立て、あつた。後で聞くと僅か十日間にしる「入校」であるから